わたしの研究　㊵

テーマ

ソーシャルワーク実践の可視化と固有性の存在証明

黒木　邦弘

私の専門は、ソーシャルワーク理論です。ソーシャルワークは、社会福祉の援助活動を指し、様々な生活問題を抱える個人、家族、小集団、コミュニティ、制度、全体社会といった幅広い領域を対象にしています。

歴史的には、19世紀末以来、イギリスやアメリカの慈善活動から発展し、多様な諸科学を取り込みながら実践を積み重ね、発展してきました。「ソーシャルワーク」という用語が定着を始めて100年以上経ちますが、諸科学を取り込みながらも自生してきたのか。この疑問は、未だに議論され続けております。とはいえ、社会福祉の援助活動自体が、社会的に貢献してきたこと自体は否定されるものではありません。ここに、ソーシャルワーク理論研究の社会的使命があると考えます。

一方、日本では、日本学術会議（2008．７）「提言：近未来の社会福祉教育のあり方について－ソーシャルワーク専門職資格の再構成に向けて－」の中で、５年から10年をめどにした資格再編が提言されています。その背景として、生活課題が多様化・拡大化・複合化する現状への対応やソーシャルワーカーの社会的必要性があげられています。しかし、ソーシャルワーカーの活動内容の見えにくさ、社会的認知度の低さに問題があるとも指摘され、先ほども述べたように、理論的に自生したと言い切れる状況に必ずしもなっておりません。ゆえに、この提言の一つに、「教育内容としては、社会科学や人文科学等の幅広いカリキュラムで編成できる教育体制として整備し、同時に社会福祉学およびソーシャルワーク実践の固有性について深みのある教育をおこなっていく。」とあるのも頷けます。このことから、ソーシャルワーク実践の可視化と固有性の存在証明が重要と考えます。

なお、既に、社会福祉士及び介護福祉士法は20年ぶりに改正され、本学社会福祉学部の教育も大きな影響を受けています。

以上のような経過から、私は実践の科学化・理論化が重要と考えます。ソーシャルワークは、パールマンの問題解決理論を援用するまでもなく、人々の抱えた生活問題の解決を志向します。しかし、繰り返しになりますが、その実践自体が何であったのか、実証し、公言してこなかった不十分さが課題と言われています。特に、日本の場合、傾向として制度・政策に優位性があり、生活問題を抱える人の視点から実践が組み立てられ、制度や政策に一定の影響力を与えていくという構図に必ずしもなっていないように思います。そういった意味で、私は実践に基づく研究を大切にしています。

ソーシャルワーク理論研究は、何といって

も実践と研究の往復に価値があります。私が関わっている実践。それは、10年間、関わり続けている「宅老所」という活動です。「宅老所」は、認知症を抱えた方の支援に取り組む、日本で独自の発展をした草の根福祉活動です。

しかし、この間、私には苦い経験があります。私が関わる宅老所の実践は、厚生労働省に注目され、介護政策に一定の影響を与えました。私は、幸運にも政策立案者たちがどのような視点で、実践をとらえ、制度化していくかを目の当たりにしました。しかしながら、自分の言語を十分に示せなかったことを悔やんでいます。質の高い実践を前にして研究者として無力さを痛感した次第です。とはいえ、実践が制度や政策に影響を与えることは確信しました。そして、宅老所の取り組みは、認知症の方のケアに留まらず、家族や同じ困難を抱えた人々、地域を巻き込んだものであり、ソーシャルワークとの接点を改めて実感しました。

この経験をふまえて、私は全国にあるソーシャルワーク実践を実証する共同研究をすすめています。未だ実証中ではありますが、子どもからお年寄り、病院や老人ホーム、社会福祉協議会まで社会福祉の援助活動が展開されるすべての場に優秀な実践者が存在し、実践を行っています。その実践者に共通していること。それは価値・目的と視点・対象認識の相互一体的連続的な思考です。近著の中でも、実践者が何を大切にし、何を目指しているのか。また、福祉サービスの対象とされる認知症高齢者をどのような見方で、どのように捉えているかを事例として紹介しています。例えば、宅老所のワーカーは、「今の社会では100歳を迎えても安心して暮らせる居場所がない」と認識しています。このように社会の有り様を、献身的に地域活動に関わった一人の高齢者から読み解いています。そういった中でも、当事者は地域に住み残ることを疑わず、自らの生き方の継続を貫こうとしています。そこに、専門職として認識すべき価値があり、地域をかえるという視点が生まれます。ほかにもソーシャルワーカーが果たす機能・役割、方法、時間や場の設定なども実践を形づくる重要な要素であり、これらの要素が一つのまとまりのある実践として行為化された時に、ソーシャルワーカーのスキルは目に見えます。

このように、実践事例を丁寧に紐解き、積み上げていくことは地道な研究ですが、今後100年の社会福祉教育を考えた場合に必ず意味のあるものになると信じています。

また、見方をかえれば、事例は貴重な教材であり、社会福祉を学ぶ魅力を雄弁に語ってくれます。学生たちは、事例を通じてソーシャルワーカーとしてのアイデンティティを実感し、ソーシャルワークの魅力を感じていきます。

さらに、宅老所の研究が、ソーシャルワークを発展させたアメリカ、介護保険を学んだドイツ、そして今後の福祉政策を模索している韓国や中国の研究者に注目されています。「研究、教育、そして国際化を実践はつないでくれる」。現時点で私が研究を続けてきた実感です。

（本研究所研究員　ソーシャルワーク）